

An Overview of Psychological Studies on the Processes Aroused by Schadenfreude

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 伸弥, 藤森, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1459

シャーデンフロイデが喚起するプロセスについての 心理学的研究の概観

An Overview of Psychological Studies on the Processes Aroused by Schadenfreude

加藤 伸 弥*
KATO, Shinya

藤 森 和 美**
FUJIMORI, Kazumi

1 問題と目的

私たちは、自分の苦しみだけでなく、他者の苦しみや不幸にまで関心を寄せ、相互に協力関係を保ちながら生活している。もし私たちが、恒常的に不幸の犠牲者と同様の苦しみを感じとり、救いの手を差し伸べることが出来れば、問題は大きくなるのかもしれないが、現実はその単純なものではない。特に、利害や優劣が自分と対極する他者と遭遇した時に、その関係性が故、同義の感情を共有することが難しく、他者の成功を素直に喜べない、あるいは他者の失敗と一緒に悔しがれないということが経験されやすくなる。むしろ、他者の失敗に歓喜する場合すらある。

とりわけ、本邦においては、こうした状態を表した言葉として「隣の貧乏カモの味」や「他人の不幸は蜜の味」というものがある。これらの諺が示すように、私たちは、他者の不幸を見聞きした時、「ざまを見ろ」「いい気味だ」と感じてしまうことがある。こうした感情はシャーデンフロイデ (Schadenfreude) と呼ばれており、他人の不幸を第三者的視点から喜ぶ感情と定義されている (Smith, Turner, Garonzik, Leach, Urch-Druskat, & Weston, 1996)。シャーデンフロイデはドイツ語であり、損害を表す「シャーデン」と、喜びを表す「フロイデ」という2つの言葉が合わさったものだという (Smith, 2013 澤田訳 2018)。

通常の世界生活において、シャーデンフロイデに類するような感情を公言することは、浅ましい行為であるという暗黙的な了解がある。こうした規範意識や社会通念に基づかれ、シャーデンフロイデが明快に、かつ積極的に言明されることは少ない。しかし、他者が不幸に陥った時に快感を得るという性質を、私たちは備えてしまっている。事実、他者

* 武蔵野大学人間社会研究科

** 武蔵野大学人間科学部 教授

の不幸を知覚した時に報酬系の活動が活発になることが明らかにされており (Takahashi, Kato, Matsuura, Mobbs, Suhara, & Okubo, 2009), 神経科学的見地に基づいた立証もなされている。

シャーデンフロイデというものは、人間誰しもがもつ感情として古くから存在してきた。現代社会においては、戦後のデモクラシーも手伝ってか、万人の平等が謳われている。しかしながら実際は、財産や能力、境遇や容姿に至るまでの様々な領域において差異が生じている。このような現実直面している私たちは、あらゆる指標で他者との競争や比較を行いながら生きている。誰かの失敗が自らの利益になる場合、その失敗を喜ぶというのはごく自然な現象であるし、自分よりも劣位な他者と比べることによって安堵することもままある。こうした例は枚挙にいとまがなく、特に私たちが生きているような競争社会において、シャーデンフロイデは身近な感情のひとつであるといえよう。

このように、シャーデンフロイデは私たちにとって決して縁遠いものではない。ただし、「人の不幸を喜ぶ」という行為が道徳的に是認され難いという常識が邪魔をしてか、シャーデンフロイデが積極的な議論の対象となることは少ないように見受けられる。しかし、インターネットの急速な発展に伴い、人の不幸に触れる機会が特別に多くなった環境の中で生きている以上「人の不幸を喜んではならぬ」という従来の道德教育や価値意識の伝染だけでは歯止めがきかなくなってきたように思われる。それどころか、シャーデンフロイデを、愚かなものだからといって心の奥底に閉じ込め、社会全体で否認することによって、却って問題行動の増加や複雑化を招いているようにも判じられる。事実昨今では、インターネット上での誹謗中傷に苦しみ心を痛めた人物が、自ら命を絶つといった事例が国内外を通じて取り沙汰されている。こうした誹謗中傷は、バッシングの渦中にある人物に対して建設的な指摘をすることによって、改善を促したいというよりも、叩かれている他者を見て面白いと思ひ、その面白さをより強く感じたいという動機づけに操られ、やり返されるリスクが極めて少ない環境を利用することによって攻撃を増長させている要素の方が大きいようにも看取される。実証的にもシャーデンフロイデにはいじめを維持、助長させる効果があると指摘する研究も存在する (澤田, 2009; 黒川, 2016)。また、オンライン上での有名人に対する中傷との関連性も取り上げられている (Ouvrein, Vandebosch, & De Backer, 2020)。これらを踏まえると、いじめ免疫や誹謗中傷の防止のためにもシャーデンフロイデ研究のより一層の普及が期待される。

ところで、シャーデンフロイデという感情の全貌を仔細に捉えるためには、感情の作用のみならず、どのように喚起されるのかという視点も重要となる。そこで本論文では、シャーデンフロイデの理論的検討の一端として、シャーデンフロイデの喚起プロセスについて扱った研究を概観する。

2 シャーデンフロイデが喚起されるための条件

Ben-Ze'ev(1992, 2000) は、シャーデンフロイデが喚起される状況には、(a) 他者に起った不幸がそれほど深刻ではない、(b) 不幸の責任が当事者自身にあるとみなされる、などの特徴があると述べている。

まずシャーデンフロイデは、病気や死などのような、深刻なものに対しては経験されることはなく、日常的に遭遇しやすい身近な不幸に対して経験されるという。たとえば、山本(2007)が大学生と大学院生46名を対象に行ったインタビュー調査では、受験の失敗や成績不振、先生からの叱責や失恋によってシャーデンフロイデが経験されるという結果を得ている。そして、不幸の責任の所在が当人にあると判断される状況、すなわち、当該の不幸が相応しいものであるとみなされる場合にシャーデンフロイデが経験されやすいという点についても、一貫した結果が報告されている。たとえば、Van Dijk, Ouwerkerk, Goslinga, & Nigweg(2005)は、大学生を対象とした実験で、不幸の責任が他者自身にあると判断されると、当該の不幸が相応しいものであるという知覚が高まり、その結果としてシャーデンフロイデの喚起が促されることを実証した。同様にBrigham, Kelso, Jackson, & Smith(1997)も、不幸の相応さ(deservingness)¹がシャーデンフロイデを強化したと報告している。

さて、これらの条件は、他者の状況をどのように判断するのかといった、認知面に着眼して言及されたものといえる。次節では、シャーデンフロイデが喚起されるまでのプロセス、すなわち、前提となる状況からシャーデンフロイデの喚起までの流れについて扱っていく。

3 シャーデンフロイデの三者間動機づけモデル

Wang, Lilienfeld, & Rochat(2019)は、過去30年に渡り提供されてきた、シャーデンフロイデに関する諸理論を見直し、その喚起プロセスを、三者間動機づけモデル(A tripartite motivational Model)と名付けた。

三者間動機づけモデル(A tripartite motivational Model)とは、シャーデンフロイデが、「妬み」「社会的アイデンティティ」「正義」の3つの側面から形成されていると整理したモデルである。彼らによると、これらの側面は、相互に関連しながらも、弁別可能な動機づけとしてラベリングできるという。

ここからは、これら3つについて個別に概観する。

3-1-1 妬み

妬み(envy)とは、他者が自分よりも何らかの点で有利な状況にあることを知ることによって生じる不快な感情のことである(澤田,2006)。

日常生活において、何らかの点で自分よりも優れている他者と遭遇することは少なくな

い。こうした状況下において私たちは時として、自らの劣等性を隠そうとする要素も含みながらその相手を疎しく感じ、敵意を向けることがある。キリスト教における7つの大罪の一翼を担っていることから分かるように、妬みは人間の悪意のひとつとして、また愚かな感情のひとつとして古くから取り沙汰されてきた。さらに厄介なことに、妬みは極端な不快さ、痛みを伴うことで知られている。実証的には、妬みを喚起させている時のヒトの脳活動において疼痛系が活性化することが解明されている。これを明らかにしたTakahashi, Kato, Matsuura, Mobbs, Suhara, & Okubo (2009)は、いみじくも妬みのことを「心の痛み」と称している。以上のような論点を鑑みると、妬みは、社会的に見て好ましい感情とはいえないし、精神的な不快さを伴うという事を考えれば、出来れば感じたくはない感情のはずである。妬みの不快さで心が苦しめられている時に、その妬みの原因となる他者が社会的に引きずり降ろされたらどうなるだろうか。そんな時こそ私たちは、心を弾ませるのかもしれない。

3-1-2 妬みとシャードンフロイデの関連

両者の関連についての実験的研究 妬みが、シャードンフロイデを予測する前提感情として、重要な鍵を握っているという言説は古くから存在してきた。たとえば、ドイツの哲学者であるNietzsche(1880 中島訳, 1965)は、「他者の不幸を喜ぶことは、自身の妬みを和らげる効果がある」と記述している。古くから哲学や文学の領域で両者の関連が議論されてきたものの、実証研究が展開されるようになったのは1990年代になってからだ。

その先駆けとなったSmith, Turner, Garonzik, Leach, Urch-Druskat, & Weston (1996)は、映像を用いた実験を行っている。この研究では、医大に進学予定と設定された実験協力者(以降、サクラと表記する)が有利条件と平均条件の役を演じ、その映像が被験者に見せられた。有利条件のサクラは、a) 優秀であり、生物学の研究室では顕微鏡を覗き込む、b) 高級マンション暮らしで、高級車のひとつとして数えられるBMWに乗っている、c) 魅力的な女性と、一緒に食事を作る、という状況を演じた。一方の平均条件のサクラは、a) 宿題に苦闘し、生物学の研究室では顕微鏡を洗う、b) 一般的な学生寮住まいで、移動には満員電車やバスを使う、c) 平均的な容姿の知人と食事をする、という状況を演じた。これらの映像を見せられた被験者は、有利条件のサクラに対して妬みを感じると回答した。さらに後日談として、被験者に、映像に映し出された人物が自分の悪行のせい(研究室からアンフェタミンを盗む)で不幸に陥った(警察に捕まった)ことを知らせた。すると、妬みを喚起させた(有利条件の)サクラの不幸が、そうではない(平均条件の)サクラの不幸よりも喜ばしいということが明らかにされたのである。

ところが、その後が続いたいくつかの研究では、妬みとシャードンフロイデの関連を支持しない結果も報告されている。たとえば、Hareli & Weiner (2002)によれば、シャードンフロイデの喚起にかかわる要素は妬みではなく、他者に対する敵意や嫌悪感であるという。同様にFeather & Sherman (2002)も、憤慨感情とシャードンフロイデの関連を支持し

たのみで、妬みとの関連を見いだせていない。

Van Dijk, Ouwerkerk, Goslinga, Nigweg, & Gallucci (2006) は、このように相反する結果が得られた原因が、研究の手続き上の相違、すなわち感情の測定方法の違いにあると指摘した。彼が着目したのは、被験者と不幸に見舞われる他者(以下、ターゲット人物)の性別のコントロールの仕方である。妬みとシャーデンフロイデの関連を支持した研究(Smith et al.,1996)では、被験者の大半が男性で、ターゲット人物も男性に設定されているのに対し、関連を支持しなかった研究(Hareli et al., 2002; Feather et al., 2002)では、被験者の70%以上が女性であり、ターゲット人物は男性か女性のいずれか、もしくは性別が特定されない場合があったのである。彼は、男女ほぼ同数の被験者を確保した上で、同性か異性のいずれかのターゲット人物の情報を提示する形で手続き上の問題を克服した。結果は、ターゲット人物が同性である場合にのみ、妬みがシャーデンフロイデを予測するというものであった。すなわち、性別という観点から類似している妬ましい他者の不幸に対して、喜びやすくなるということが示されたのである。さらにこの研究では、シャーデンフロイデは女性よりも男性に高いという結果も得られており、先行研究は矛盾するものではないと指摘した。本邦においても、澤田(2008)が大学生を対象とした研究を実施している。この研究では、被験者とターゲット人物が同性になるようにコントロールされており、妬み感情を介してシャーデンフロイデが喚起することを明らかにしている。

このように、研究デザインの違いに妬みとシャーデンフロイデの関連についての矛盾する結果が得られた原因があると指摘する流れがある中、近年では、妬みの概念に着目する流れも浮上してきている。

妬みの概念に着目した研究 これまでの心理学や思想学では、妬みの概念について、数多くの知見が提供されてきたものの、必ずしも一致した見解は得られていなかった。

たとえば、妬みを、「劣等感」「怒り」「悪意」「敵意」を包含するネガティブな感情として位置付ける立場(Klein, 1975; Lieblich, 1971)がある一方で、妬みには、正負両面の多様な特徴が存在すると主張する研究者もいる(高橋, 1987; Parrott & Smith, 1993)。そもそも英語では「envy」のみで表される妬みも、日本語では、よりネガティブな意味として用いられる「妬み」と、よりポジティブな意味として用いられる「羨み」という言葉が存在し、両者は異なる文脈の中で用いられている。実際、他者の成功に対して「羨ましい(I envy you)」と述べることは日常生活によくあるが、これは賞賛に近い表現である。オランダ語においても、意味合いが異なる「afgunst (malicious envy: 悪性妬み)」と「benijden (benign envy: 良性妬み)」という言葉があり、前者(悪性妬み)は優れた相手の地位を損なわせることを目的とした動機につながるのに対し、後者(良性妬み)は自分の地位を向上させることを目的とした動機につながるという(Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, 2009)。こうした見解は、他の研究者からも指摘されており、例えば Neu (1980) の、「憧憬的妬み(admiring envy)」と「悪性妬み(malicious envy)」や、Smith & Kim (2007) の、「良

性妬み (benign envy)」と「根源的妬み (envy proper)」といった種々の表現方法が存在する。

実証的には、それぞれの妬みが生み出す結果について検討されている。とりわけ、悪性妬みは、いじめ加担 (澤田・金網・鈴木, 2017) や、職場におけるハラスメント (Kim & Glomb, 2014) と関連することが指摘されている。また, Hill, DelPriore, & Vaughan (2011) は、妬みに関連する記憶が、思慮を要する作業に対する意欲を低めるということを示唆している。彼女らの研究では、妬ましく思える人物、もしくはそうではない人物のインタビューのいずれかが呈示され、インタビューに登場した人物の名前をどの程度覚えているかを測定した。その結果、妬ましい人物の名前のほうが、そうではない人物の名前よりも正確に記憶している確率が高いということが明らかとなった。さらに、その後に行われた認知課題に取り組む時間を比較したところ、事前に妬ましい人物の名前を正確に言い当てられた被験者ほど課題に集中して取り組む時間が、より短くなっていたという。これは、妬みに関連した記憶が、思慮を要する作業のパフォーマンスを低下させていたことを意味する結果であった。こうした研究から、悪性妬みが対人場面においても、自己のパフォーマンスにおいてもネガティブな帰結をもたらすことが考えられる。他方の良性妬みの効果を検討した研究では、良性妬みが、拡散的思考を要する課題のパフォーマンスの向上をもたらす (Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, 2011) ことが明らかにされている。彼らは、良性妬みが自分自身を改善する動機付けになるという仮説を検証するために、一連の研究を行っている。まず、被験者は架空のシナリオを読んでから、「良性妬み」「悪性妬み」「憧れ (admiration)」の程度を測定された。その後、知性と創造性を測定するための検査 (Remote Associates Test : McFarlin, & Blascovich, 1984) を行ったところ、良性妬み条件に割り当てられた被験者の成績が最も良好であった。また、彼らは、上方比較過程にある人物と自分を比べた時に、自己改善をした結果として目標達成が可能だと判断すると、良性妬みが喚起し、その結果としてパフォーマンスが向上することも発見した。逆に、目標達成が不可能だと判断され、さらに賞賛が高まると、憧れ (admiration) が喚起すると示唆している。また、特性としての良性妬みに着目した研究でも、良性妬みを抱きやすい者は、高い目標設定をすることを媒介して、幅広い年齢層におけるマラソンの成績 (Lange, & Crusius, 2015) や、大学生における教養科目の成績 (澤田・藤井, 2016)、体育大学に所属する学生における対戦競技 (野球, バスケットボール, サッカー) の競技レベルの成績 (上野・陶山・小塩, 2018) が向上したことが報告されている。

これらの研究は、「妬み」という概念が、ポジティブな行動とネガティブな行動の正反対の帰結をもたらすことを強調しているが、あくまでも、両者ともに同一の感情である。その根拠として重要な鍵を握るのが妬みにおける「痛み (pain)」の存在である。妬みが喚起するための状況下では、社会的比較において、自分がライバルよりも下位に位置するという理由で精神的苦痛を感じるという。妬みの概念化に見られる正負両面の現れは、この苦痛を和らげるために生じる行動が、破壊的 (悪性) であるか、建設的 (良性) であるかの二通りに導かれるという類型に過ぎず、その根源たるものは「痛み」であり、両者は同一の

感情である (Tai, Narayanan, & McAllister, 2012) と考えられている。同様に, Van de Ven(2016) も, 良性妬みであってもライバルとなる他者に対してフラストレーションを経験していると述べている。

Lange, Weidman, & Crusius (2018) は, データ駆動型アプローチを用い, これまでに議論されてきた妬みについてのすべての要素を網羅するように項目を収集し, 3つの下位因子 (痛み, 良性妬み, 悪性妬み) を特定した。痛みとは, 他者と比べた時の自分が, 下位に位置していることを自覚した時に感じる, 劣等感 (Inferiority) や不満 (Frustration) といった不快な反応のことである。良性妬みとは, 目標達成に向けた, 改善動機 (Improvement Motivation) や, 妬ましい人物に対する競争 (Emulation) といった意味を含む妬み感情のことである。悪性妬みとは, 妬ましい人物に対する敵意 (Hostility) や憤り (Resentment) といった意味を含む妬み感情のことである。そして彼らは最終的に, 従来の妬み研究を包括した「痛み駆動双数妬み理論 (Pain-driven Dual Envy Theory)」を提唱している (Figure1)。この理論では, 行為傾向としての状態的な良性妬みと悪性妬みが, 痛みによって駆動すると説明しており, 構造方程式モデルを用いた分析で, その説明力の高さを主張している。さらに彼らは, 妬みとシャーデンフロイデの関連についてのメタ分析を実施している。その結果, シャーデンフロイデとの相関は悪性妬みが高く, 良性妬みが低いことや, 痛みはその中間的な相関係数に位置するという結果を得ている。すなわち, 痛みに伴われる状態的な妬みの内, これまでの研究で悪性妬みとラベリングされてきた妬みが, シャーデンフロイデと高い関連を有していたのである。この研究結果から, 妬みの概念化の違いが, 妬みとシャーデンフロイデの関連についての矛盾する結果を提供してきたと考えることができる。

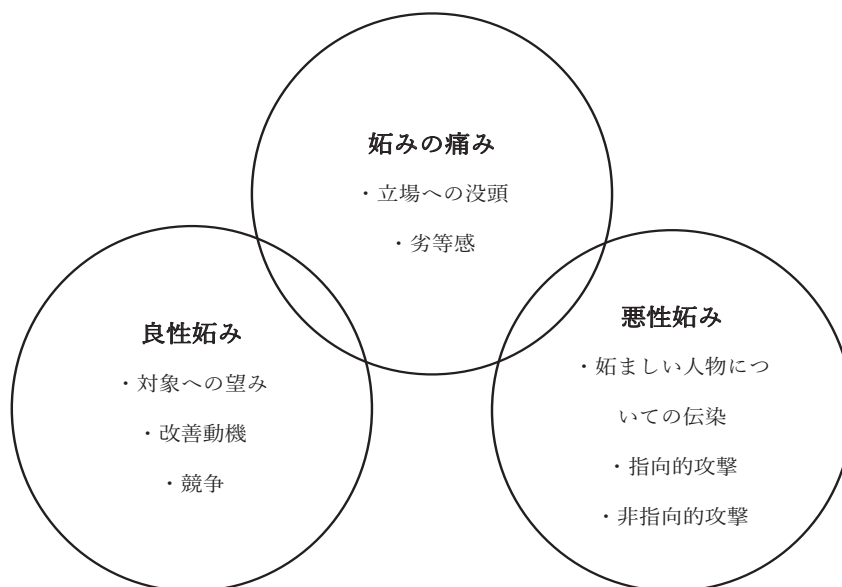


Figure 1 Pain-driven Dual Envy (PaDE) theory (Lange et al. (2018) を参考に作成)

3-2-1 社会的アイデンティティ

集団間関係理論とは、人間の社会生活における社会的カテゴリーを、自己が所属していることを自覚する対象である「内集団 (in-group)」とそれ以外の対象である「外集団 (out-group)」にわけ、内・外集団の区別が起こる心理的起源やその帰結を分析する研究の流れから言及された種々の理論のことである (Stephan & Stephan, 2018)。

Tajfel, Billig, Bundy, & Flament (1971) は、実験参加者となった小学生に対し、集団分割のためのテスト (たとえば、スクリーンに映った2種類の抽象画の好みの判断など) を行わせ、その結果に基づいて実験参加者を2つの集団のどちらかに割り当てた (テストの結果に基づく割り当てというのは、実験手続き上の建前であり、実際の分割は無作為になされていた)。その後、実験参加者に対し、自分以外の他者を被分配者とした報酬分配を行わせた。すると、実験参加者は、テストの結果のみで割り当てられ、その他の類似点は不明瞭であるにもかかわらず、自分と同じ集団 (内集団) に所属する他者に対して、より多くの金銭を与えたのである。加えて、内集団の報酬をできるだけ多くするというよりも、内集団と外集団の差額を大きくしようとする方略を優先して用いたことも明らかにした。

このように、外集団よりも内集団に対して優遇したり、好意的にふるまったりする現象は、内集団びいき (ingroup favoritism) と呼ばれ (Tajfel, 1978)、差別をはじめとした集団間葛藤の生起・激化を促す重大な要因のひとつだと指摘されている (Diehl, 1990)。

Tajfel & Turner (1979) は、内集団びいきや外集団への差別が生起するメカニズムを解明するべく、社会的アイデンティティ理論 (social identity theory) を提唱した。人は自己定義を行う際に、個人の独自の特徴が強調される個人的アイデンティティに依存するばかりでなく、所属する社会集団の特徴が強調される社会的アイデンティティからも影響を受ける。この理論によると、人は、自身の社会的アイデンティティを特定する際に、カテゴリー差異化とカテゴリー比較という2つの認知過程を経験するという。その時人は、その差異を実際以上に強調して知覚し (Tajfel & Wilkes, 1963)、更に肯定的な社会的アイデンティティを求める欲求を満たすために、内集団と外集団の社会的比較 (Festinger, 1954) を通して、内集団の優れた面を強調するという特徴があるというのだ。これには、自分が所属する集団を高めるのと同時に、その集団と他集団の差異意識を高めることによって、自分の評価をも高めようとする自己高揚方略が伴う。

社会的アイデンティティ理論では、こうした人間の基本的な特徴が、集団間行動における内集団びいきや外集団への差別をもたらすと結論付けた。

3-2-2 社会的アイデンティティとシャーデンフロイデの関連

このように、社会心理学では、従来から、集団間関係についての研究が盛んに行われてきていたが、近年では、こうした集団間行動の背後にシャーデンフロイデが存在しているのではないかという議論が展開されるようになってきている。集団間相互作用におけるシャーデンフロイデの存在を確かめるために、スポーツチームを応援するファンを被験者

とした研究がある。

たとえば Cikara, Botvinick, & Fiske (2011) は、アメリカ大リーグの伝統的なライバルチームであるレッドソックスとヤンキースの熱狂的なファンを被験者として確保し、以下の条件についての感情を測定した。その条件とは、(a) 応援するチームに対するライバルチーム（レッドソックスファンに対してはヤンキース、ヤンキースファンに対してはレッドソックス、以下同様）の失敗状況、(b) 応援するチームに対するライバルチームの成功状況、(c) 中立的なチーム（オリオールズ）に対するライバルチームの失敗状況、(d) 中立的な2チーム（オリオールズとブルージェイズ）それぞれの成功と失敗状況（統制条件）、の4つである。実験の結果、応援するチームの失敗とライバルチームの成功に対して怒りと痛みを感じ、応援するチームの成功とライバルチームの失敗に対して喜びを感じていたということが明らかとなった。さらにそれだけでなく、その怒りと痛みが、応援するチームの失敗の時よりも、ライバルチームの成功の時のほうが強く経験されていたことや、喜びが、応援するチームの成功よりもライバルチームの失敗の時のほうが強く経験されているという結果も得られたのだ（なお、統制条件ではいずれの感情においても低い値であった）。この結果は、ライバルチームの存在が肯定的な社会的アイデンティティを求める欲求の脅威となったため、シャーデンフロイデを強めたと解釈されており、サッカーの国際試合におけるオランダチームの応援団が、ドイツチームの敗北に対してシャーデンフロイデを経験したという研究 (Leach, Spears, Branscombe, & Doosje, 2003) とも矛盾しない。

上述の研究にみられるような、集団間相互作用がシャーデンフロイデを喚起させるという現象は、スポーツチームのファンに限ったことではない。Hamilton, Sherman & Lickel (1998) によると、集団間の戦いは、社会的識別の意識を高めるために機能するという。その際の一般的な感情反応として、味方の苦痛に対しては共感を引き起こす (Batson, 1991) のに対し、敵の痛みは喜びの原因になりやすい (Smith, Powell, Combs, & Schurtz, 2009) というのだ。

外集団の何らかの不利益は、より望ましい自己定義を獲得するために寄与するのである。こうしたことから、集団間行動の背後にシャーデンフロイデが存在すると考えられている。

3-3-1 正義

既述したように、シャーデンフロイデは相応な (deservingness) 不幸に対して喚起されやすいということが一貫して報告されている。この理由について Smith (2008 澤田訳, 2018) は、相応な不幸を喜ぶことは、その喜びと悪意が無縁に見えるという魅力があるためであると説明している。また Watts (2008) は、喜びと悪意の切り離しが顕著になるのは、相応性の判断が明らかであって、文化的に共有された基準に従っている時であると述べている。Smith (2008 澤田訳, 2018) がいうように、他者の不幸を喜ぶ理由が一般的な基準からみて妥当なものであると、所属する社会集団から、当該の喜びを感じても構わないと判断されやすくなる可能性がある。すなわち、社会正義から逸脱したことによって生じた不幸に対

しての喜びは、社会全体から是認されやすくなるということだ。実際に、シャーデンフロイデの機能に着目した研究では、シャーデンフロイデの体験を他者と共有することで、行動の倫理的規範を作り出すということが実証されている (Dasborough, 2017)。

しかしながら、相応性の判断に備えられたこうした動機づけは、しばしば主観的で偏りのある判断を伴うという。これについて、研究者は公正世界信念 (just world belief) という概念を用いて検証している。

公正世界信念とは、「この世界では、行いに相応しい成果を与えられるものであるという因果応報の信念であり、よい行いをする者は報われ、悪い行いをする者には罰が下ると素朴に考える信念」のことである (Lerner, 1980 ; 北村, 2019)。一見すると、公正な世界を信じたいという動機付けには罪がないように思われる。しかし、これまでに行われてきた研究は、この信念が罪のない人物が苦しんでいる時に、その人物を非難するという効果をもたらすということを示している (Shaver, 1970 ; Rubin & Peplau, 1975)。

その先駆的研究となった Lerner(1966) は、72名の女子大学生を被験者に、対連合学習課題 (paired-associate learning task) に参加する犠牲者役のサクラ²を観察させるという実験を行っている。被験者は、サクラが誤りを犯すと、重度な痛みを伴う電気ショックが与えられるのを目撃する。この実験における電気ショックは、不公平と思いき理由から与えられている設定となっていた。実際に、無実の人が電気ショックを受けるということの目撃は、被験者の同情を強めたという。その後、犠牲者にあたるサクラを救済することが可能な群に割り当てられた被験者は、救済の道を選んだ。しかし、犠牲者の運命を変える余地が与えられず、引き続きサクラが電気ショックを受けるだろうと予測させられた群では、犠牲者の特徴を悪く評価し (devaluation), 排除 (rejection) する傾向が見られたというのだ。研究者は、犠牲者に対する評価の低下や排除は、電気ショックの苦しみがサクラに与えられていることによって、被験者 (自分たち自身) へは向けられないと見なされる場合に、もっとも強くなると述べている。さらに、こうした反応が見られた理由を、両群共に、正義への関心があったからなのではないかと説明している。すなわち、人間は、ある被害者が当該の被害にあった原因をどこにも帰属できない場合や、犠牲者と自分の属性に類似点 (先の実験の場合、被験者にとってサクラは、同一の研究に参加する別の役割の被験者であっただけで、自分もサクラと同じ被験者という立場であると認識している) がある場合に、罪のない被害者に対して非難を向けることで、公正な世界に対する信念を固める傾向を有しているということである (Correia & Vala, 2003 ; Correia, Vala, & Aguiar, 2007)。

3-3-2 価値理論とシャーデンフロイデに関連

社会正義への関心がシャーデンフロイデに関連することを示した研究では、公正世界信念がシャーデンフロイデを強めることを支持する知見が一貫して報告されている (Pietraszkiewicz, 2013 ; Wilco, van Dijk, Goslinga, & Ouwerkerk, 2010)。

Pietraszkiewicz(2013) は、被験者に対して、自分が所属する世界の信念を脅かすような

人物と、そうではない人物のシナリオを読ませた後で、その人物の不幸が記載されたオンライン雑誌を見せた。すると、被験者は前者の記事を読むことにより多くの時間を費やしたのである。つまり、被験者にとっての公正さを脅かすという意味での、悪行を働いたと思しき人物の不幸を楽しんだのである。このような傾向、すなわち、公正世界信念とシャーデンフロイデに正の相関があるという傾向は、尺度を用いた研究でも実証されている (Greenier, 2017)。

公正世界信念という概念から説明されているように、正義は個人的な動機づけであり、主観的なものである。ある人物の公正な世界への動機づけは、別の人物にとっての相応性の判断とは異なる場合もある。すなわち、人間のバイアスそのものがシャーデンフロイデを喚起させる要因になりうる可能性があるということを示唆している。

4 考察

本論文では、人間の感情のひとつであるシャーデンフロイデが、いかにして喚起するかについての実証研究を概観した。その結果から、シャーデンフロイデは人間の普遍的な性質と密接に関連していることが確認された。Wang et al. (2019) の三者間動機づけモデルでは、「妬み」「社会的アイデンティティ」「正義」がシャーデンフロイデの予測因子として取り上げられている。本論で取り上げた種々の先行研究によると、この三者はどれも、実際の社会生活の中できく自然に生じる現象だという。それ故、この世の中には、あまねくシャーデンフロイデが存在しているといえるだろう。シャーデンフロイデ研究を社会的な課題の解決のために役立てていくには、感情喚起のプロセスという視点に加え、喚起された結果、どのような影響を及ぼしうるのかといった視点からの知見も必要となる。シャーデンフロイデが感情である以上、人間の心理システムから完全になくすことを目指すのは難しい。ならば、シャーデンフロイデの適切な利用、統制方略などを示し、感情を現在の社会にとって望ましい方向性で扱えるようにすることを目指したくなる。もし、他人を陥れてしまうような邪悪な感情を上手く扱えるようになれば、いじめをはじめとした対人的な問題は解決の兆しを見せるかもしれない。

本邦において、シャーデンフロイデが実際の対人場面でいかに作用しているのかについての研究は始まったばかりと言えよう。澤田 (2011) や山本 (2016) が述べているように、いじめを取り巻く集団の中に、シャーデンフロイデを感じている人物が存在し、その人物がいじめを持続させるひとつの要因になっている可能性もある。換言すれば、「シャーデンフロイデの伝染が集団的破滅の助長因子となる」といったところだろうか。しかし、こうした結論に完全に収束してしまうことには慎重を要さなければならない。事実、シャーデンフロイデのポジティブな側面についての報告も存在する。たとえば、相羽 (2018) は、シャーデンフロイデが、社会規範の維持に役割を果たす可能性を示唆している。また、渡邊 (2014) は、シャーデンフロイデの喚起や、その共有が自尊感情を高めると述べている。今後の研

究では、こうした帰結の違い、すなわち、シャーデンフロイデが引き起こす結果がポジティブなものになるのか、ネガティブなものになるのかの分岐が、何によってもたらされるのかを検証していくことが必要となるだろう。

近年、少数の研究では、シャーデンフロイデの個人差についての議論を展開している。たとえば、パーソナリティ心理学においてDark Triad(サイコパシー、マキャヴェリアニズム、ナルシズム)と称される、冷酷で邪悪な人格特性を有する人物は、シャーデンフロイデを経験する可能性を高めると指摘する研究がある(James, Kavanagh, Jonason, Chonogy, & Scrutton, 2014; Porter, Bhanwer, Woodworth, & Black, 2014)。また、自尊心の低さ(Van Dijk, Ouwerkerk, Wesseling, & van Koningsbruggen, 2011; Feather, 1989)や抑うつ傾向の高さ(Chambliss, Cattai, A, Benton, Elghawy, Fan, Thompson, Scavicchio, & Tanenbaum, 2012; Pietraszkiewicz & Chambliss, 2015)がシャーデンフロイデの経験頻度を高めると示唆する報告もある。こうした研究までをも鑑みると、シャーデンフロイデは普遍的な感情であるといいながらも、その具現化には個人差があるという事も視野に入れておく必要があるといえる。

また、Laura & Gregory(2018)は、妬みに良性と悪性があるのと同じように、シャーデンフロイデにもサブタイプが存在する可能性があることを指摘している。こうした主張に依拠するならば、感情に駆動される意思決定や行動のあり方の差異をより仔細に検証するために、ひいては、シャーデンフロイデのポジティブな利用可能性の発見や、ネガティブな帰結からの脱却のために、研究材料の開発や理論の蓄積が急務といえよう。

-
- 1 この場合の「相応な」不幸とは、ある人物の行為に対して下される結果が、その人物にとっての不幸であるということが、一般的な価値基準からして妥当であるという意味として扱われていると思われる。
 - 2 この研究では、実験協力者が、課題に対して誤った回答をすると、苦痛を伴う電気ショックを与えられ、その場面を被験者が目撃するという設定であったが、これはあくまで実験手続き上の建前であり、実際には電気ショックは与えられていない。

引用文献

- 相羽将智 (2018). シャーデンフロイデと意思決定との関連の検討. 感情心理学研究. 26.
- Ben-Ze'ev, A. (1992). Pleasure-in-others misfortune. *Iyyun: The Jerusalem Philosophical Quarterly*, 41, 41-61.
- Ben-Ze'ev, A. (2000). *The subtlety of emotions*. Cambridge : MIT Press.
- Brigham, L., Kelso, K.A., Jackson, M.A., & Smith, R.H. (1997). The roles of invidious comparisons and deservingness in sympathy and Schadenfreude. *Basic and Applied Social Psychology*, 19(3), 363-280.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Chambliss, C., Cattai, A., Benton, P., Elghawy, A., Fan, M., Thompson, K., Scavicchio, D., & Tanenbaum, J. (2012). Freudenfreude and Schadenfreude Test (FAST) scores of depressed and non-depressed undergraduates. *Psychological Reports*, 111(1), 115-116.
- Cikara, M., Botvinick, M. M., & Fiske, S. T. (2011). Us versus them: Social identity shapes neural responses to intergroup competition and harm. *Psychological Science*, 22(3), 306-313.
- Correia, I., & Vala, J. (2003). When will a victim be secondarily victimized? The effect of observer's belief in a just world, victim's innocence, and persistence of suffering. *Social Justice Research*, 16, 379-400.
- Correia, I., Vala, J., & Aguiar, P. (2007). Victim's innocence, social categorization, and the threat to the belief in a just world. *Journal of Experimental Psychology*, 43, 31-38.
- Dasborough, M., & Harvey, P. (2017). Schadenfreude: The (not so) Secret Joy of Another's Misfortune. *Journal of Business Ethics*, 141, 693-707.
- Diehl, M. (1990). The minimal group paradigm: Theoretical explanations and empirical findings. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*, 1. New York: Wiley. 263-292.
- Feather, N.T. (1989). Attitudes towards the high achiever: The fall of the tall poppy. *Australian Journal of Psychology*, 41(3), 239-267.
- Feather, N.T., & Sherman, R. (2002). Envy, resentment, Schadenfreude, and Sympathy: Reactions to deserved and undeserved achievement and subsequent failure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 953-961.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Greenier, K.D. (2017). The relationship between personality and schadenfreude in hypothetical versus live situations. *Psychological Reports*, 121(3), 445-458
- Hamilton, D.L., Sherman, S.J., & Lickel, B. (1998). Perceiving social groups: The importance of the entitativity continuum. In C. Sedikides, J. Shopler, & C. Insko (Eds.), *Intergroup cognition and intergroup behavior* (pp. 47-74). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Hareli, S., & Weiner, B. (2002). Dislike and envy as antecedents of pleasure at another's misfortune. *Motivation and Emotion*, 26, 257-277.
- Hill, S.E., DelPriore, D.J., & Vaughan, P.W. (2011). The cognitive consequences of envy: Attention, memory, and self-regulatory depletion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101, 653-666.
- James, S., Kavanagh, P.S., Jonason, P.K., Chonogy, J.M., & Scrutton, H.E. (2014). The Dark Triad, Schadenfreude, and sensational interests: Dark Personalities, dark emotions, and dark behaviors. *Personality and Individual Differences*, 68, 211-216.
- Kim, E., & Glomb, T.M. (2014). Victimization of high performers: The roles of envy and work group identification. *Journal of Applied Psychology*, 99(4), 619-634.
- Klein, M. (1975). Envy and gratitude. In *Envy and gratitude and other works*, 1946-1963. London : Hogarth Press. 176 - 235.
- 北村英哉 (2019). 責任帰属に及ぼす道德基準と公正世界信念の影響 東洋大学社会学部紀要. 56(2), 39-48.

- 黒川雅幸 (2016). 児童・生徒のネットいじめにおける” witness” の検討. *Human Developmental Research*, 30, 71-82.
- Laura, C.C., & Gregory, D.D. (2018). Schadenfreude and the spread of political misfortune. *Plos One*.
- Lange, J., & Crusius, J. (2015). Dispositional Envy Revisited: Unraveling the Motivational Dynamics of Benign and Malicious Envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41(2), 484-494.
- Lange, J., & Weidman, A. C., Crusius, J. (2018). The painful duality of envy: Evidence for an integrative theory and a meta-analysis on the relation of envy and schadenfreude. *Journal of Personality and Social Psychology*, 114, 572-598.
- Leach, C. W., Spears, R., Branscombe, N. R., & Doosje, B. (2003). Malicious pleasure: Schadenfreude at the suffering of another group. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(5), 932-943.
- Lerner, M.J. (1980). *The belief in a just world: A fundamental delusion*. New York: Plenum.
- Lerner, M.J., & Simmons, C.H. (1966). Observer's reaction to the "innocent victim": Compassion or rejection? *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 203-210.
- Liebllich, A. (1971). Antecedents of envy reaction. *Journal of Personality Assessment*, 35, 92 - 98.
- McFarlin, D. B., & Blascovich, J. (1984). On the remote associates test (RAT) as an alternative to illusory performance feedback: A methodological note. *Basic and Applied Social Psychology*, 5, 223-229.
- Neu, J. (1980). Jealous thought. In A. O. Rorty (Ed.), *Explaining emotion*. Berkeley: *University of California Press*, 425-463.
- Nietzsche, F.W. (1880). *Wanderer und sein Schatten*. (ニーチェ, F.W. 中島義生 (訳) (1965). *漂泊者とその影*. 人間的, あまりに人間的 II (ニーチェ全集, 6) 理想社.)
- Ouvrein, G., Vandebosch, H., & De Backer, C. J. S. (2020). Online Celebrity Bashing: Purely Relaxation or Stressful Confrontation? An Experimental Study on the Effects of Exposure to Online Celebrity Bashing on the Emotional Responses and Physiological Arousal Among Adolescent Bystanders. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 16.
- Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1993). Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 906-920.
- Pietraszkewicz, A. (2013). Schadenfreude and just world belief. *Australian Journal of Psychology*, 6.
- Pietraszkewicz, A., & Chambliss, C. (2015). The link between depression and schadenfreude: Further evidence. *Psychological Reports*, 117(1), 181-187.
- Porter, S., Bhanwer, A., Woodworth, M., & Black, P.J. (2014). Soldiers of misfortune: An examination of the Dark Triad and the experience of schadenfreude. *Personality and Individual Differences*, 67, 64-68.
- Rubin, Z., & Peplau, L.A. (1975). Who Believes in a Just World? *Journal of Social Issues*, 31(3).
- Shaver, K.G. (1970). Defensive attribution: Effects of severity and relevance on the responsibility assigned for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 101-113.
- Stephan, W.G., & Stephan, C.W. (2018). *Intergroup Relations. Social Psychology Series*.
- Smith, R.H. (2013). *The Joy of Pain: Schadenfreude and the Dark Side of Human Nature*. New York: Oxford University Press.
- (リチャード・H・スミス, 澤田 匡人 (訳) (2018). *シャーデンフロイデ——人の不幸を喜ぶ私たちの闇* 勁草書房)
- Smith, R. H., & Kim, S. H. (2007). Comprehending envy. *Psychological Bulletin*, 133, 46-64.
- Smith, R.H., Powell, C.A.J., Combs, D.J.Y., & Schurtz, D.R. (2009). Exploring the when and why of schadenfreude. *Social and Personality Psychology Compass*, 3, 530-546.
- Smith, R.H., Turner, T.J., Garonzik, R., Leach, C.W., Urch-Druskat, V., & Weston, C.M. (1996). Envy and Schadenfreude. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 158-168.

- 澤田匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処 - 感情心理学からのアプローチ - 新曜社.
- 澤田匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響 - 罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して - 感情心理学研究, 16(1), 36-48.
- 澤田匡人 (2009). 小中学生のいじめに対する態度とシャーデンフロイデ. 日本心理学会大会発表論文集.
- 澤田匡人 (2011). いじめを哀れむ児童・いじめに講じる生徒: シャーデンフロイデと同情から見たいじめ目撃者の類型の試み. 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 20.
- 澤田匡人・金網知征・鈴木雅之 (2017). 悪性妬みはいじめを助長するのか? 感情心理学研究, 24.
- 澤田匡人・藤井勉 (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか? - 良性妬みに着目して - 心理学研究, 87, 198-204.
- Tai, K., Narayanan, J., & McAllister, D. J. (2012). Envy as pain: Rethinking the nature of envy and its implications for employees and organizations. *Academy of Management Review*, 37, 107-129.
- Tajfel, H. (Ed.) (1978). *Differentiation between social groups: studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.
- Tajfel, H., Billig, M.G., Bundy, R.P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178. Turner, J.C.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *Social Psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks / Cole.
- Tajfel, H., & Wilkes, A.L. (1963). Classification and quantitative judgement. *British Journal of Psychology*, 54, 101-114.
- Takahashi, H., Kato, M., Matsuura, M., Mobbs, D., Suhara, T., & Okubo, Y. (2009). When Your Gain Is My Pain and Your Pain Is My Gain: Neural Correlates of Envy and Schadenfreude. *Science*, 323, 937-939.
- 高橋由典 (1987). 羨望論 思想, 757, 23-46.
- 上野雄己・陶山智・小塩真司 (2018). スポーツ競技者における競技種目と競技レベル, 妬み感情の関連 - 悪性妬みと良性妬みに着目して - 感情心理学研究, 25(3), 53-57.
- Van de Ven, N. (2016). Envy and Its Consequences: Why it is Useful to Distinguish between Benign and Malicious Envy. *Social and Personality Psychology Compass*, 10(6), 337-349.
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2009). Leveling up and down: The experiences of benign and malicious envy. *Emotion*, 9, 419-429.
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2011). Why envy outperforms admiration. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 37, 784-795.
- Van Dijk, W.W., Ouwerkerk, J.W., Goslinga, S., & Nigweg, M. (2005). Deservingness and Schadenfreude. *Cognition and Emotion*, 19, 933-939.
- Van Dijk, W.W., Ouwerkerk, J.W., Goslinga, S., Nigweg, M., & Gallucci, M. (2006). When people fall from grace: Reconsidering the role of envy and Schadenfreude. *Emotion*, 6, 156-160.
- Van Dijk, W.W., Ouwerkerk, J.W., Wesseling, Y.M., & van Koningsbruggen, G.M. (2011). Towards understanding pleasure at the misfortunes of others: The impact of self-evaluation threat on schadenfreude. *Cognition & Emotion*, 25(2), 360-368.
- Watts, A.E. (2008). *Laughing at the world: Schadenfreude, social identity. And American media culture* (unpublished dissertation). Northwestern University; Raney, A. A., & Bryant, J. (2002). Moral judgment and crime drama: An integrated theory of enjoyment. *Journal of Communication*, 52, 402-415.
- Wang, S., Lilienfeld, O.S., & Rochat, P. (2019). Schadenfreude deconstructed and reconstructed: A tripartite motivational model. *New Ideas in Psychology*, 52, 1-11.

- Wilco,W., van Dijk., Goslinga,S & Ouwerkerk,J.W. (2010). Impact of Responsibility for a Misfortune on Schadenfreude and Sympathy: Further Evidence. *The Journal of Social Psychology*. 148(5),631-636.
- 山本良子 (2007). 他者の不幸を悲しむ情動, 喜ぶ情動: 面接調査から把握されたその実態. 京都大学大学院教育学研究科紀要 53, 273-285.
- 渡邊ひとみ (2014). シャーデンフロイデの共有が自尊感情に及ぼす影響. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 40(1), 36-44.